

十年後の夢

里崎 雪

わしは今日も 牛に餌をやる
たった一人で 牛の世話をする
ほんの一年前 家族で汗水たらし
一生懸命 雨の日も風の日も
家族で力を合わせて 牛の世話をしていた
牛の花子が 難産でやっとの思いで
子牛を産み 死んでしまった時
孫のゆう子は泣いた
泣いて泣いて大変だった
そうだよな
よちよち歩きの頃から
友達だった花子が死んだのだから
見ている本当に可愛想だった
でも生まれた次郎を花子の分もと
家族みんなで可愛がった
一生懸命育てた
雨の日も風の日も家族で力を合わせて
牛の世話をしていた
ほんの一年前――
牛のタカ子が出産間近だった
家族みんなで楽しみに待っていた
三月十二日 フクシマゲンパツジコ
牛たちは高いベクレルの渦の中に
取り残された
牛の世話をしたくても
警戒区域
ピピピッ 警官隊に止められる
「そんなバカなことがあるか

俺の家だぞ 俺の土地になぜ
入っちゃいかんのだ」
みんな詰め寄った

「犯罪です」

国命により立ち入り禁止区域は
入ったら犯罪なのだ

「俺の家だぞ」

「俺の土地だぞ」

「牛が待っている俺たちが世話をしなくちゃ

牛は死んでしまう！

タカ子は出産間近なんだ

ちきしよう」

どうすることも出来ない

泣いて泣いて泣きに泣いた

地獄――

原子力地獄――

わしは今日も牛に餌をやる

たった一人で牛の世話をする

息子家族は都心へやった

若いもんは未来に責任がある

わしは一人で牛の世話をする

それが生かされたわしの使命だ

わしは七十二才

大丈夫だあと十年は牛の世話が出来るだろう

十年後

昔のように

家族総出で

牛の世話をしている姿を

夢に見ながら

私に出来ること

私は二十四年間で東京で暮らした

二〇〇八年に平戸に移住した

東京は遠くなった

でも

毎年東京へ行っている

今度行ったら

考えていることがある

国会議事堂前に

座り込みをする

手作りのプラカードを持って

「今こそ 代替エネルギー政策を

国策で」と